

関西・関東より東北へたこ焼き機を持って…

行ってきました。

ゴールデンウィークに「カダンミツ」として活動を行ってきた中の一部をご紹介します。
5年経った今、東北はどうなっているのか。実際に行って感じたことをお伝えできれば幸いです。

文/清本章浩 写真/山崎良

ビールとおつまみ
いただいたちゃいました！

帰りにのみな！
また来てね！



キャプションキャプション
キャプションキャプション
キャプションキャプション
キャプションキャプション
キャプションキャプション
キャプションキャプション

災害公営入谷住宅

南 三陸町にある2014年に完成した「災害公営入谷住宅」へ訪問。集まってくれた住民の方々と、南三陸のタコを使用したたこ焼きパーティーを開催しました。たこ焼きは買って食べるもので自分で焼いたことなんてない！という方が多く、たこ焼き作りも体験してもらいました。主婦の方々はカダンミツ特製のたこ焼きメニューを公開してお料理教室まで開かれることに！お話をたくさんしましたが、話題はどついても震災の話に。「あの地震の後、絶対に津波が来ると思った…チリ津波を経験したからね」避難したけど、すぐ家に戻った人がたくさん流されたんだよ」「ここもいろんな仮設から人が集

まっけていて、仮設住宅にいた時はどイベントも交流する機会もない。今日だつて初めて見る人もいろいろ。今日、居住者の口から語られる一言一言が学びとなり、また多くのことを考えさせられました。2011年3月11日に被災された方々は避難所から仮設住宅、そして災害公営住宅や自宅再建などで引越した方々も、せつなく仲良くなった近所の方と離ればなれになり、また「から近所の方とお付き合いを始めるのはいけません。まもなく震災から5年が経過しますが、震災当初繰り返し叫ばれた「絆」を再度考え、現在薄れいくある人と人の繋がりを新しく創る、そして維持するお手伝いをしつつしていく必要性を感じました。



▲実際に津波に呑まれた納屋をスタッフやボランティアでリノベーションした手作り感ある暖かい内装。2階の部屋には浸水でできた線をあえて残してある。
▶絶品「日替わりランチ」 秋刀魚やほや、採れたてのクルマミを使った和え物、いちじく等、旬の食材がずらり。これにデザートとコーヒーがついて1,000円！！

△ DETA
果樹園カフェゆめハウス
宮城県女川町高白浜高白 25-2
「新しい東北」ビジネスコンテスト 2015 優秀賞受賞

果樹園カフェ ゆめハウス

女 川町高浜地区にある「ゆめハウス」にお邪魔し、お話を伺ってきました。ここでは60〜80代の女性スタッフが布草履作りやカフェの調理と運営、男性は畑で農作物作り、20・30代のスタッフがそれら加工・梱包。また、さんまの形をした「さんまなたい焼き」を移動販売しています。難しいとされている、「老若男女が自然と集まり協力し、競争する」組織が作られていて、皆さん本当に楽しそうに活きいき働いておられました。…そして絶対食べてほしいのが名物の「日替わりランチ」！地元の魚介類や農作物を熟練の女性スタッフにより調理。東北のリアルな家庭の味を味わうことができます。素材の味を知り尽くした

スタッフ達が手間暇かけたランチは優しく、食材本来の旨味を最大限引き出して、これにたく絶品。このランチを自営で地元の方々だけでなく、多くの観光客やボランティアも多数訪れているそうです。現在ゆめハウスの皆さんは「さんまなたい焼き」の移動販売中。かける曲「さんまなたい焼き」で紅白歌合戦出場を本気で目指しています。自身も被災されている代表の八木さんは「どうせやるなら大きな夢を見たい。みんなと同じ夢が見たい」と目を輝かせながらお話ししてくださいました。そんな八木さんに影響されたスタッフの「夢」と「笑顔」がいっぱい詰まった素敵な場所。…ね、なんだか行ってみたいかったですよ？



東北の「イマの声」

写真・文/山崎良



「チョコ食べていい？」
「今から新しいお家を見に行くから、あとでね。」

気仙沼の急な勾配の坂道を登っている。こちらの親子に出逢った。男の子は写真を撮るたびにポーズを決め、女の子はシャイなのか何が起っているのか分からないような顔で、口をぽかーんと開きながらレンズではなく母親の顔を凝視していた。写真を何枚か撮らせてもらい、そのお礼にとチョコレイトを子供たちにかさずそのチョコレイトを食べてもいいかと母親に聞いていた。すると母親はこう応えた。「今から新しいお家を見に行くから、あとでね。」
まだまだやんちゃな年頃なのでチョコで手を汚してしまうと今から内覧する家の壁や戸などいたる所を汚しかねないのだ。震災から4年が経過した2015年でもプレハブの仮設住宅に住んでいる方はいまだに8万人以上に上ると言われている。まだまだ多くの方が仮設住宅での生活を余儀なくされているのが現状だ。津波から逃れ助かったとしても避難生活の中で病気になるケースや自ら命を絶つというケースも少なくはない。
こちらの親子はこの坂の上に新しい生活を長い間夢みて、まさにそれを始めようとしている。地震も津波も経験していないであろう子ども達とは対照的に母親はどちらもを経験し、妊娠期子育ての一番神経質になる時期を仮設住宅で、そして恐らくは避難所でも過ごしたのである。2人の子どもの姿を連れる母親の凛とした後ろ姿にシャッターを切らずにはいられなかった。



Photo Kesenuma Miyagi

かだんみつ通信

恋する

Vol.00

私たちの目線から見た
東北のイマを伝えます。

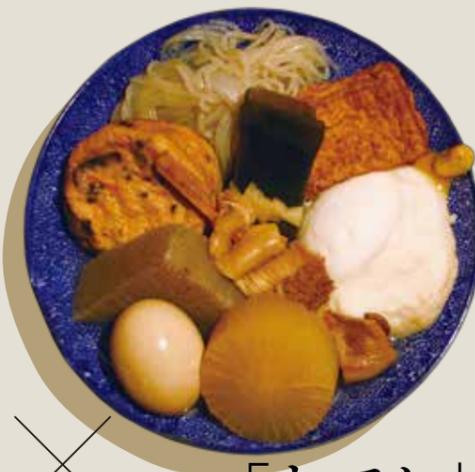
TOHOKU MARIARZU STORY

東北マリアージュ物語

日々欠かさず酒を嗜む、お酒のプロ達に聞いた
東北の「旨い酒」と、最高にマリアージュする肴をセットでご紹介。



「大七純米生酏」



「おでん」

日本酒の最も正統且つ伝統的な醸造法である
「生酏造り」にこだわった東北の名酒。

極寒の中人の手で低温からじっくりと醸しあげ、通常の
倍以上の時間をかけて造られる。時間をかけ自然発酵
させた生酏造りだからこそ様々な成分が絶妙にとけあ
い、簡易な近代製法では得られない深みのある味を味わ
うことができる。その中でも大七の生酏はキレがあり、ま
るで森林の中にいるような爽やかなアフターテイストが
愉しめるのが特徴。さらに「お酒のもっている実力をさら
け出してしまおう」と言われるお燗によって引き出される
生酏の魅力に気づいてしまったら、もう貴方は大七酒造
の虜に…。 そんな「大七純米 生酏」は旨み成分が豊富
で腰があるので、料理を選ぶことなく何にでも合う。だ
が、あえておすすめしたいのが鍋と並ぶ冬の代名詞「お
でん」。体温よりちょっと熱いくらいのぬる燗と、湯気の
立ち上るおでん。 とろとろの大根や味のしみわたった
卵、ピリっとしたからしを味わった後に、生酏を一口。ふ
わっと広がる香りとしっかりした旨味が口の中が洗われ、
またおでんを一口。これはもう止まらない。一層仕合わせ
な気分なることまちがいない。

かだんみつについて

私たち「カダんみつ」は 蜜蜂が蜜を運ぶように、人と人との触れ合いを大切に、楽しさや笑顔を運ぶ少数ボランティア
チームです。震災のあった年より現在まで、福島県・宮城県を中心に東北支援を続けております。主な活動内容は仮設住
宅や公営住宅での交流会です。数ある被災地の問題の一つとして、居住者が他者と触れ合うコミュニティが構築されてい
ないのが挙げられます。その問題を少しでも改善するため、たこ焼きパーティーなどを通して住宅居住者とボランティアとの交
流、居住者同士の交流を目的とした活動を行っています。それから、東北の今!を発信するためのフリーペーパーを発行し
ています。我々の活動を通して見えてきた被災地の問題や現状を報告するための報告書でもあり、魅力溢れる東北の人、酒
食、場所などをコッソリお知らせして、恋してもらおうラブレターでもあります。東北に恋をした「カダんみつ」メンバーはみ
んなお酒が大好き。一緒に飲み倒れてくれるメンバーを随時募集しています!

寄付金について

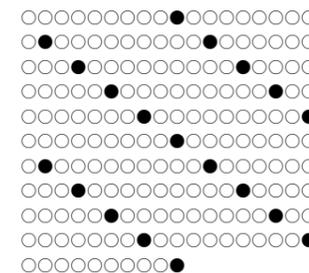
我々「カダんみつ」の活動にご賛同いただける方へ
私たちはこれからも被災地のニーズに合わせた活動を続けていきます。被災地の復興を応援していきたいという方、
カダんmitsの今後の活動を見守っていただけるとは下記連絡先までご連絡下さい。また、広告掲載も募集し
ております。

【連絡先】代表 清本 mail / kiyofmw@yahoo.co.jp tel / 090-4769-8794

「恋する かだんみつ通信 vol.00」 企画・制作：東北ボランティアチーム カダんみつ

Editor In Chief / Suttiiy Suzuki / Editor / Akihiro Kiyomoto / Photo Grapher / Ryo Yamasaki / Member / Iku / MAKKI - Mattoshi

Editor's Note



バーベキュー・ケータリング・出張焼肉のことなら、
当店にお任せください!!



お肉の田中屋



福岡県糟屋郡志免町別府西 3-2-7

お問い合わせはこちらまで mob:090-3666-2718/Tel:092-957-7729/Mail : info@tanaka-web.com